

日本 ハンザキ研 究所ニュース 2008(12) : 通巻 No. 35



発行2008年11月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

NPO法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

はんざきブロック2年ぶりの開帳の結果は!?!?

豊岡市の出石川や朝来市市川などで使われた「はんざきブロック」であるが、まだ本格的な追跡調査は実施されていない。私はこのブロックが気に入ったので研究所に一組寄贈してもらって展示している。設計図やパンフレットの写真などでは実感が沸かないが、目の前において眺めていると、より良くするための案が浮かんでくる。改良Ⅲ型と呼んでいる物を二組、研究所横の川辺にある朝来市河川ステーションに設置してもらったのは2年前になる。中が気になって仕方が無かったが、蓋の重量が200kgもあつては開けてみる事ができない。このたび、メーカーであるランダスの4人の職員が蓋を取り外して観音開きの鉄製の蓋に取り替えてくれた。

さて、その作業の合間をぬって内部の調査を実施した。中には石やU字溝、エンビのパイプなど複雑な空間を作るための材料が詰め込まれている。冷たい水の中からそれらを取り出して内部に潜む生物のチェックを行った。二組6個のブロックの内3か所にハンザキが入っていたのである。一匹は、この9月の繁殖パーティに参加していたオス個体で、腹部にあった傷も完治していた。後の二個体は全長45㎝と10㎝の新規個体であった。45㎝の個体は腹がポツテリして良く太っていると思ったら、後刻20㎝ほどのアマゴのメス(半消化のアマゴ腹部に卵を確認)を吐き出していた。10㎝の方は2歳の幼生で、これも貴重な確認記録をとることができた。

カワムツ稚魚の群や、カワニナ、サワガニ、水生昆虫なども多数確認できたので、はんざきブロックの効果を検証することも出来た。しかし、多量の土砂が流入して硫化し黒い砂が溜っていた部分もあったのでこれを改善することが必要になってくる。川の水の流れ方や増水の影響など今後も観察を続けながら改善点を考えて行きたいものである。しかし、半数のブロック内にオオサンショウウオを確認出来たので、大いに河川の現場でのモニタリングにも期待が持てると思う。

両開きの蓋になり、容易に内部を観察できるようになったが、従来どおりに大量の石やU字溝などを入れてはチェックするのに手間がかかって仕方がない。生き物にとってはその方が良いに決まっているが、人間の都合とはなかなか一致させるのは難しい。年間を通じての定期的な追跡調査を実施していくには、内部を簡単に見ることができて又動物にも隠れ家や餌の取りやすい環境を与えてやらねばならない。しばらく観察しながらこの問題を解決させてみようと考えている。

黒川の秋の自然を満喫！

－秋のトレッキング 三国岳コース－

朝来市教育委員会 足立 美喜

11月15日(土)第3回秋のトレッキングに参加しました。今回のルートは、大外(おそと)から三国岳へ登り、長野へ降りてくるものです。トレッキングにはずぶの素人の私は、前日から「途中で登れなくなったらどうしょ」と不安がいっぱいでした。しかし主人に前回の時もそう言うてたけど、結局帰ってきたら「先生がゆっくり登ってくれたから全然しんどくなかったわ」って、今回もきっと大丈夫やし、元気出して行ってきいと言われました。そういえば10月の直谷溪谷の時も、同じようなことを言っていたことを思い出し、その言葉に後押しされてお弁当を持っていざ黒川へと出かけました。

黒川自然公園センターに着くと、スタッフの真澄さんがいつもの素敵な笑顔で迎えてくれました。全員集合の後、車に分乗してスタート地点の大外へ出発しました。最初は轍のある林道、先頭を歩く吉田先生(旧・姫路工大ワンゲル部 OB)は後ろを気遣いながらゆっくり、ゆっくりのペースです。林道は長野まで続いていて「昔は大外に学校があって長野の子供たちには通学路だった」のだと言われてびっくり！ずっと林道なら楽だけど三国岳を目指す私たちは道を外れて尾根登りが始まりました。遠くから見ていた山は紅葉真っ盛りで見事でしたが、山の中に入ると落ち葉がいっぱい。クヌギやコナラの茶色になった落ち葉を踏みしめ、どんぐりや松ぼっくりを拾いながら、山の木のことや虫のこと色んな話をしながら楽しく歩きました。栗賀山や青倉山を見ながら登っていくと、左右には深い谷が……。下を見るとその深さにびっくり半分、こんなに高いところまで登ってきたんだなあと感激しました。登っていくにつれ赤や黄色に紅葉した葉が太陽の光を浴びながらきらきらと風に舞ったり、足元にもフワフワになるほどの沢山の落ち葉あつたりと何ともいえない幸せなひと時でした。

山の自然に励まされ登っていくと「あれが目指す三国岳、随分近くなったでしょ」との声に、彼方を見上げると確かに山が見えはするけれど私には決して「近く」ではないように……。 「これから少しの間アップダウンがあつて、急な斜面を登ります。その前におやつ休憩をとって、それから最後のひと踏ん張りですよ」と聞いておやつを楽しみにひたすら歩みを進めました。いよいよ急斜面の下について「さあここでエネルギー補給」と、頂いたおせんべいなどおやつをしっかり食べて、覚悟を決めて登り始めました。

ここからは一気に142mの標高差を上る急勾配、木の幹にしがみついたり、木の枝で作って頂いた杖を握り締め、ただただ足元を見つめながら一步一步登ると、ついに山頂に到着。さすがに但馬・播磨・丹波の三つの国にまたがっている三国岳。山頂からは丹波市役所や、加美町の集落が見えて360度の眺めには幾重にも重なった山の稜線、赤や黄色に染まった鮮やかな山々があり、本当に頑張つて登つたご褒美がそこにありました。苦しかった急斜面も忘れて「良かったあ、ばんざーい！」と感激のひと時でした。

そしてもう一つの楽しみは山の上で食べる格別の味のお弁当です。そして今回も先生方のおかげで標高 855.2 ㍎の山頂だというのに、あったかい味噌汁と食後のホットコーヒーマまで戴き、またまた大感激でした。一時間ほどの休憩もあつという間に過ぎて名残を惜しみながら下山です。

尾根伝いに下っていくと、生野と加美町の境に。「昔はここを長野と加美の人が盛んに行き来していて、今でも親戚が多いんですよ」と教えていただき、こんな山道を昔の人はすごいなあともまたまたびっくり！大きな杉林の中を長野の集落へと下りながら、谷底にぽつぽつと水溜りがあるのを見ていると、しだいに川とも呼べないほどの小さな流れが出来、林道に近づく頃にはせせらぎの音さえ聞こえてくる立派な流れになっていました。川ってこんな小さな水溜りが集まって、少しずつ大きくなっていくことに感心してしまいました。

川底の小さな石の一つひとつまでしっかり見える澄んだ水も、青い空も鮮やかに色づく山も、さわやかな空気も、みんなみんな豊かな黒川の自然を育む大切な宝物。こんな大切なものを体いっぱいを感じながらの秋のトレッキングは最高でした。そして、こんなに大切なものをもっともっと「大切」にして、人も動物も川に生きる生き物達にも、みんなに優しい暮らしが出来たらいいなと改めて感じた一日でした。きっと次も装いを新たにした黒川の自然に会いに、このトレッキングの会に参加したいと思います。サポートして下さったスタッフの皆様、本当に有難うございました。素敵な一日に感謝です。

.....

姫路市伊勢自然の里・環境学習センターでの勉強

当時は姫路市の北西端であった林田町大堤に作られた、休耕田などを活用した総合学習のビオトープである。ここへは、日本工科専門学校の都市工学科（造園や土木工事などの現場監督養成）の学生の体験実習として毎年利用させていただいている。土木工事などの現場で多少なりとも環境に配慮することを頭の中に植えつけてほしいと言う、同校の中農理事長の考えに共感して授業を受け持っている。

最近では見ることも無くなったヤギが雑草を食ってくれることやアイガモ農法、タガメやモリアオガエルなどの生息環境の講義を受けた後、現場に挑戦する。構内の境界を流れる大津茂川のコンクリート三面張りを眺めつつ素晴らしいビオトープとの対比を考えさせられる。しかし、脇坂レンジャーの解説で驚いたのは、4~5 ㍎はあるコンクリート護岸をホタルの幼虫が必死で登って行くのだそうである。彼らは成虫になる前に、水中から岸の土の中に蛹室を作ってから、夏の夜に飛び立つのだが、コンクリートでは無理だと思っていた。雨模様の夜間に光りながら護岸をよじ登っていく幼虫を確認した時には感激したそうである。こんな観察の話は学生たちの心にも残ったであろうが、私自身にも新鮮なことだった。だからと言って、コンクリートで良いと言うことではない。ホタルなどにとって、もっと楽な暮らしが出来るように考えてやらねばならないだろう。

秋のハンザキ研究所 芝学園生物部 OB が行く！

OB 夫人 愛妻めぐちゃん

皆様、初めまして！ 僭越ながら私はこのたび「ハンちゃんと遊ぼう・秋のハンちゃんツアー」のライターに指名されました某 OB の自称愛妻めぐちゃんです。まずは、芝学園でどこ？という疑問にお答えしますと、かの有名な東京タワーの展望台から見下ろした真下に近い場所にある中高一貫男子だけの進学校です。東京オリンピックの前年にハンザキ研所長の栃本先生が新米教師として着任したことから始まります。生物部の顧問として、年齢も大して差も無く、兄弟と言うかガキ大将として毎日遊びまわっていたようです。「生物部野球班」とか「生物部卓球班」と称して他の部活のお邪魔をしていたといひます。

でも、栃本先生が遊んでばかりいたと言うのは誤解です。ここで匿名希望の研究所員の方にお話していただきました。「こう言うのもなんですが、所長は根っからのフィールドワーカーです。オオサンショウウオの飼育研究施設を廃校を利用して立ち上げたんです」たしかに、校庭のプールの「ハンちゃん集合住宅」には、多数の住人が昼間にもかかわらず顔を見せてくれました。夜になったら、もっと活発にウイंकしてくれるのでしょうか？ 何だか栃本仙人のことばかりになってしまいましたが、今回のツアーに参加した面々をちよろっと紹介しちゃいます。

まずは、ツアコン・敬ちゃんです。準備万全、埼玉から愛車パジェロ 10 君を駆って先行生野入り。某大学の医学部教授とは思えぬフットワークの軽さです。(准教授はやりにくくは無いのだろうか?) 次は、東京からの鈴木さん、生物部時代には植物専門で、栃本顧問に教えていたそうです。横浜から参加の清水さんは不思議な人である。鎌倉の洋蘭園で大活躍をしていたのに、スッパリとやめて今は仕事をしないで生きているという。最後の一人は、地元兵庫県の但馬地区から参加の中村・赤髭先生です。赤髭先生は「僻地医療に携わりジイジイ・バアバア」のアイドルになっているようで、顔を見せるだけで病気が治ってしまうそうです。

いよいよ「行くぞハンザキ研」です。何を隠そうリポーターは虫や爬虫類が天敵なので。出来ればお目にかかりたくなかったのですが、覚悟を決めてレポートのため校舎 1 階に足を踏み入れました。でも、ハンザキ民俗資料室は良かった。ストラップやエコバッグ、T シャツ、サンちゃんクッキーなど特産品として町おこしになるでしょう。しかし、最後の展示室には、一部のマニア受けだと思います。スズメバチや事故死したリス、首切り死体のサンちゃん・・・エグイ！ いくら、人間社会への警鐘とは言え・・・すぐに室外へ出ましたが、OB の面々は所長の説明を嬉々として聞いているのでした。生物部って「生きているもの」だけでなくホルマリン漬けにした遺骸でも OK なんですね。

やっと温泉とお食事タイムになりました。お宿は民宿とは思えないアメニティグッズも揃っていて、温泉も趣があり名前も美人の湯だそうです。料理は民宿の大將が腕をふるった「アマゴ料理」各種で、おいしく頂きました。満足でした！ 又来年も OB 会で！



写真1 東京などから集合した還暦の面々(左から3人目が愛妻さん)



写真2 豊岡市立高橋小学校のオープンスクール



写真3 NPO イベント「秋のトレッキング」



写真4 日本工科専門学校生が初めて触れたヤギ



写真5 はんざきブロックに入っていたハンザキ



写真6 はんざきブロック内部観察用の蓋

ハンザキ研日誌

2008年11月

- 1 日 東京・芝学園生物部 OB ら 5 名 (教師・栃本の一期生) 還暦となり来所
- 3 日 めっちゃおもろい黒川秋の陣 (アンコウ博士は柿木理事担当)
神戸・鶴甲エコツアー 20 名見学に
- 7 日 豊岡市立高橋小学校オープンスクールに参加 (栃本・柿木)
小学館・ビーパル誌(2009 年 1 月号)「野の人」取材～9 日
- 8 日 カニ籠定期調査 (9 日取り上げ、10 籠中 3 個にハンザキ入る)
- 9 日 ハンザキの月例健康診断 (兵庫県自然保護協会の熟練ボランティアの参加があり半日で終了)
- 11 日 大阪府農と緑の総合事務所池田分室職員 2 名マイクロチップ挿入の実習に
- 13 日 朝来市立山口小学校 5 年生 37 名見学に来所
- 15 日 イベント「紅葉のトレッキング」三国岳コース 11 名
- 17 日 上水源の受水槽の掃除 (1 年ぶりで半分くらい泥が溜まっていた)
- 19 日 月例モンドリ調査 (カワムツとタカハヤのみであった)
早くも初雪うっすらと白く
- 20 日 先月 20 日に産卵行動をしていたアマゴの発眼卵確認 (20 卵中 1 死卵)
- 21 日 ハンザキの餌用のニジマス納入
275 回調査終了 (10 月 20 日～)
- 22 日 日本工科専門学校・都市工学科生実習 (姫路市伊勢自然の里環境学習センターで)
- 25 日 276 回調査 (～12 月 16 日)
- 26 日 ランドスの野村氏他 3 名来所、「はんざきブロック」に観察用の蓋取り付け
6 ブロック内の生物調査で全長 70 ㍉・45 ㍉・10 ㍉のハンザキ確認
- 28 日 三重県教育委員会などから 3 名「オオサンショウウオ保護センター」視察に

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

1963 年 4 月に新米教師は教壇に立つことになった。典型的なデモ・シカ先生としてではあったが、それからの 2 年間はあっという間に過ぎていった。最初に教えた高校 1 年生が還暦となりそろそろリタイヤーだという。その中には生物部員が 7 名いたが、内 4 人が揃ってハンザキ研にやって来てくれた。それぞれの進む道は異なっていたが、あっという間に昔の雰囲気になっていくのは、良い時間を共有したからだと思う。山や川、海へと遊びまわったり、生物部野球班や卓球班などと称してガキ大将を実践していた。一緒に来た愛妻さんに、横から見た芝学園生物部 OB たちへの感想を述べてもらうことにした。

(この印刷物はセブン-イレブンみどりの基金の助成をうけて作成しています)